

鎌倉初期の禅宗と律宗

中 尾 良 信

一

建久二年（一一九二）明菴栄西が虚菴懷猷より黄竜派の禅を受けて帰朝して以後、鎌倉室町期を通じて多くの僧が渡海求法し、来朝弘法した。渡海した僧は圧倒的に禅僧が多いは、特が、次いで律僧が多いことも目をひく事実である。宋朝禅に鎌倉初期において、日本仏教界の革進を大きく助長したが、そこには純粹な禅として受容される前段階として様々な受容の形態があったと思われる。

栄西においては、その禅の兼修性は従来よりいわれているが、「扶律禅法」という表現からも窺えるように、戒律を禅の前提条件として極めて重視している。また南都東大寺の勧進となっていること、北京律の祖とされる泉涌寺の俊苾が帰朝するに及んで、建仁寺へ迎えて講義せしめていること等、律宗への積極的な接近が感じられる。栄西はその門流を通じて、円爾や無本覚心等、鎌倉で活躍した蘭溪道隆に対して京

鎌倉初期の禅宗と律宗（中 尾）

二

やその周辺で禅風を挙揚した諸師に強い影響を与えており、その円爾や覚心にも律宗との関係が見られる。
小論においては、鎌倉期以降日本仏教を風靡した宋朝禅が先住の諸宗とどういう形で接したのか、という問題を考察する端緒として、律宗との関係について少しく論及してみたい。

栄西については、前に挙げた「扶律禅法」という表現や、「持律第一葉上房」と称されたことから、その戒律の重視は明らかである。『元亨釈書』『不可棄法師伝』によると、建暦元年（一二二二）帰朝した俊苾を、栄西は博多まで迎え、四月二十三日から翌年十月稻荷還坂の崇福寺へ移るまでの約一年半にわたり、建仁寺において学人に講ぜしめている。博多まで出迎えたことの真偽は別として、栄西が俊苾に対して大きな期待を寄せていたことは事実と思われる。

宋西の場合、宋朝禅の受容の一環としての清規の整備という意味もあり、能動的に俊苒に接近したようであるが、来朝僧の先駆けとなった蘭溪道隆は、来朝前から律僧、しかも俊苒の門流と係わりを持っている。蘭溪来朝の事情については、北条時頼の招請とする説もあるが、宋土において金蘭の交わりを結んだ月翁智鏡が来朝を勧めたということが大きな要因と思われる。月翁は俊苒から教律を学んだが、泉涌寺においては坐禅に関する厳密な規定があり、月翁自身も入宋前から師俊苒を通じて宋朝禅への関心を高めていたと思われる。

蘭溪の泉涌寺来迎院駐錫は、寛元四年（一二四六）立秋以後から一年未満の短い期間であったが、その間に『泉涌寺行事次第』と金沢文庫本『蘭溪坐禅儀』を作成している。特に後者は質問に応じて参禅の用心を述べているのであるが、この場合は月翁側、即ち律宗側からの積極的な禅受容というべきであろう。

三

北京律の中心たる泉涌寺でも宋朝禅の受容が見られるが、南都東大寺の戒壇院でも禅に対する積極的な関心が感じられる。『円照上人行状』は、上足凝然が師円照と多くの門人について述べているが、円照自身が円爾の膝下で九旬参禅して

印証を得たことを記している。さらに旧院に帰った後も、昼には戒疏を講じ夜は坐禅を修したとある。その門人中にも好んで坐禅を修した人が多く、唯空房経照の如く円照の没後東福寺に住した人、越前永平寺の道元遺門に参じた如空房理然、禅院から律に入った空智房忍空等、禅と接近している人達が述べられている。

『円照上人行状』を撰した凝然自身も、法灯派の禅との関係が伝えられている。『本朝高僧伝』巻二十六「恭翁運良伝」に運良の問難に凝然が渋滞し、逆に禅要を問うて運良の答えにより仏祖の玄枢を窺見したというものである。このことは凝然伝には載せられていず、当然運良寄りではあるが、凝然は運良の依頼で、戒壇院の側にかつて叡尊が建立した旦過寮が荒廃しているのを再興したとも伝えられ、並々ならぬ禅への傾倒を感じさせる。

円照、凝然の門下である泉州久米多寺の禅爾は、無本覚心への参禅が伝えられている。禅爾は文永十一年（一二七四）二十三歳で円照より具足戒を受け、その後真言院聖守から秘密灌頂を受け、法灯国師の道風を聴いて由良興国寺へ行ったということである。弘安六年には久米多寺主顯尊の招請によって同寺へ入るが、禅爾は『本朝高僧伝』巻十七によると、禅堂を構えて昼夜二時に坐禅を修し、その間に講席を開いて、華嚴や律三大部等を講じたとある。この表現からは、あ

たかも華嚴・律よりも昼夜二時の禪定に重きを置いたかの如き印象を受ける。禪爾が坐禪に對して積極的であつたといふことの史料として、弟子湛睿に宛た書状がある。「金沢文庫古文書一七五七号・禪爾書状」には「当所にも坐禪等興行候、生前之本懷^{云々}」とあり、久米多寺での坐禪興行が生前の本懷であつたことを述べている。これ等の点から考へて、禪爾の教学の中において、覺心に參ずることによつて攝取した宋朝禪が極めて重要な意味を持つていたと思われる。

右に挙げた湛睿は、金沢称名寺三代長老として東國仏教の展開に大きな役割を果たすが、その撰述中には『百丈坐禪儀』『景德伝灯録』『碧巖録』『六祖壇經』『宗鏡録』等、禪籍からの引用が多く見られる。無論華嚴教學の立場からいへば、澄觀以来教禪一致の宗風を醸成していることもあるが、六年間の久米多寺遊學の間に、禪爾の膝下で參禪することによつて法灯派の禪の影響を受けたことも十分に考えられる。

四

榮西と俊芿との交渉においては、むしろ榮西が北京律の祖俊芿の戒律觀を受容したといふべきであるかも知れないが、月翁智鏡と蘭溪道隆、円照と円爾、さらに円照の門流と無本覺心及びその門流の關係から見れば、明らかに律宗が宋朝禪を受容するといふ形をとっている。円爾と覺心は、いずれも

入宋して臨済宗楊岐派の禪を伝えているが、円爾は釈円房榮朝を通じて、覺心は退耕行勇を通じて榮西の門流と見ることが可能である。宋朝禪を伝えた諸師と律宗諸師との交渉という観点から見て、榮西門流の人々と律宗との交渉が顯著であるといふことは、榮西自身の禪風、乃至その戒律觀に律宗と相通ずる要素があつたと見るべきではあるまいか。

また律宗の立場からいへば、現実的な行法という意味での坐禪は、宗派の境を越えて有益な行であつたのかも知れない。新來の宋朝禪を攝取することは、律宗内部に新風を吹きこむことであつたかも知れない。禪林で重んぜられた清規と四分律との關係においても、禪律二宗の接觸する余地は極めて大きいといわねばならない。

右のような事情をすべて踏まえつつ、鎌倉初期、宋朝禪を伝えて独自の兼修禪を形成していった榮西とその門流と、平安末以来戒律の復興を目指し、或る意味では鎌倉新仏教の先驅となつた律宗との交渉を考えることは、宋朝禪が日本仏教の中へ、どのような手続きを経て受容されたのか、という問題の解明の一端となり得ると思われる。

本論においては、禪律二宗の人的交流を点検するに止まつたが、今後律宗教學と禪宗清規の關係に着目し、宋朝禪林での清規の成立過程を含めてこの問題を考えていきたい。

(曹洞宗宗教学研究所所員)